

臨床研究推進研修会2016に参加して

国立がん研究センター東病院 薬剤部 金子 明日美

がん研究センター東病院のレジデントである私にとって、研究はこれまで身近なものであるとともに、先輩方との経験や知識の差を感じる高い壁のような存在でした。レジデント2年目となり、ルーチン業務や病棟活動にも少しずつ慣れ、「これから自分でも研究に取り組みたい、でも何から手を付ければいいのか」と考えたことをきっかけに本研修会に参加を希望しました。研修会では多くのことを感じ、考え、知ることができました。簡単ではありますが、本研修会の概要と感想を書かせていただきたいと思います。少しでも研究に興味のある先生方の研修参加のきっかけになれば幸いです。

研修会は1年間を通じて5回、土曜日の午後13時から18時の半日で行われました。はじめに初回の研修の前にクリニカルクエスション（CQ）を3つ提出が求められました。私は担癌患者における脂肪乳剤と感染症の関係、酸化マグネシウム錠と高マグネシウム血症、オランザピンと血糖値の3つを挙げました。患者からの質問や、医師からの問い合わせ、自分自身の疑問などから考えましたが、こんな漠然とした疑問でいいのかと不安な気持ちいっぱいでした。研修会では提出したCQの近い内容ごとにグループ分けがあり、2～3人の受講生に対し2人のチューターの先生がサポート役として担当します。このグループは全5回を通じて、ともにディスカッションを行う大切なグループであり、私がモチベーションを維持できたのも同じグループのメンバーとして導いてく

れた仲間のおかげでした。研修は毎回前半に講演、そこで学んだ知識を後半の演習で実践していくという形式でした。その場で自分のCQに合わせて学んだ知識を活用・実践することでより深い理解につながりました。分からないことがあれば、その時間でチューターの先生に質問できるので、講義中に手を挙げて質問することが苦手な私でも気軽に質問することができました。

第1回は、「臨床研究の倫理規範とIRBについて」国際医療研究センター病院の近藤直樹先生、「CQからリサーチクエスション（RQ）へ」当院の川崎敏克先生より研究の基礎となる倫理的思考、PECOやFINERの概念をわかりやすく教えていただきました。演習の時間には「文献の検索方法」を、静岡がんセンター医学図書館司書の山崎むつみ先生より実際にパソコンを操作しながら講義していただきました。学生のころから文献検索で使用していたPubMedでしたが、情報の抽出方法がたくさんあり、いままでほとんど使いこなせていなかったのだと驚きました。また、ディスカッションの時間にはチューターの先生や同じグループとなった先生へ自分の考えたCQについて相談を行い、提出した3つのCQの中から実現性や新規性を吟味しました。結果、私は「担癌患者における脂肪乳剤と感染症の関係」について今後検討することにしました。

第2回目は、「研究デザインの立案」を横浜医療センターの赤木祐貴先生よりご講演いただきました。デザイン立案で陥りがちな間違いやデザイ

ンにおける利点・欠点について整理することができ、より具体的な研究デザインの検討につなげることができました。ディスカッションの時間にはCQに関する検索結果やPECOへの変換、FINERの検討でつまづいているところをチューターの先生に報告、アドバイスをいただき研究方針を決定していききました。講演の内容としては理解できても実際に行ってみると、様々な観点で問題にぶつかり苦労しました。私は特に対象患者の選別、イベント発生の定義、後方視的研究としての限界などが問題として挙がりました。

第3回目は、「評価項目の選定と使用すべき検定方法」を帝京平成大学の濃沼政美先生にご講演いただきました。図表の読み方から検定方法の解説まで丁寧に教えていただき、実際に分散分析における統計演習としてワークシートを用いてご講演いただきました。ディスカッションの時間には、自分のCQではどの統計手法を用いて解析することが望ましいのかチューターの先生方と検討を行い、濃沼先生にもアドバイスをいただき決めることができました。

第4回目は最終回に行われる発表会に向けて、終日ディスカッションの時間に割り当てられていました。これまでの講演・演習で学んだことを自分のCQへ当てはめ、内容を吟味し、研究計画書の立案を行いました。PECO・FINERの整理、研究にいたる背景となる論文検索、研究を行う上での理論的根拠、予想される症例数の検討などこれまでの研修で行ってきた内容の総復習を相談しながら行うことができ、日常の疑問が研究として形になっていくのを感じることができました。また、後半には現時点での成果報告を行い、他のグループの先生方からご意見・質問をいただき、さらに内容を深めることができました。

最終回である第5回は、受講生による成果発表が行われました。これまで検討行った内容についてスライドを作成し、10分程度で発表を行いました。後半の時間は「千葉東病院での臨床研究、論文発表を通じて」水戸医療センターの田島進先生、「後ろ向き観察研究～失敗研究から学ぶこと」成育医療研究センターの齊藤順平先生、「2015年

度関信薬剤師会 研究論文表彰に至るまでの道程」がん研究センター中央病院の本永正矩先生にご講演いただきました。実際に日常業務を行いながら研究を行った先輩方の苦労や努力を知り、私自身もここまで作り上げた研究を形にしてみたいという意欲を持つことができました。

全5回の研修会を通して順を追って研究について学ぶことができるカリキュラムが組まれており、初心者の中でも一步一步着実に進めることができました。最初は不安でいっぱいだった自分の小さな疑問がCQとなり、研究として形になっていくさまは、回を追うごとに自分の自信にもつながったように思います。ここで、私が本研修会を受講するうえで気を付けていたことを一つお伝えしたいと思います。それは研修会が終わった後、次回の研修会までに自身の研究課題について十分考えておくこと、それをチューターの先生方へ報告することです。チューターの先生方は研修の日以外もメールで相談にのってくださいます。はじめは研修の時以外にも相談や報告をするなんて変わった研修だなと感じましたが、実際に参加してみると5回の限られた時間で研究計画書を作成するというのは非常に難しいことでした。チューターの先生方はとても親身にサポートしてくださるので、メールでの質問にも丁寧に答えてくださり、自己学習も安心して取り組むことができました。

昨今、病棟活動やチーム医療の中で薬剤師の活躍の場が広がってきています。薬剤師として介入を行うためには、薬学的視点でのエビデンスが必要だと思います。そのために新たなエビデンスの構築を臨床現場から発信するべく、これからの薬剤師の将来を担う一人として意欲的に研究に取り組んでいきたいと思っています。研修会では、疑問を研究に変換する苦労や考え方、統計手法やデータの読み方など研究について様々な方向から理解を深めることができました。そしてなによりも他の施設の先生との意見交換やつながりを持てたことはこれからの薬剤師生活の大きな財産となったと思います。

最後になりましたが、今回の研修でご講演いた

だいた先生方、お忙しいなか丁寧に企画・指導していただきました教育研修部の先生方、そしていつも親身にアドバイスしてくださった担当チューターの高橋郷先生、中國正祥先生にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

